

様式(細則 5-2)

令和 5 年 1 月 24 日

浜田市議会議長
笹田 卓 様

議員名 肥後 孝俊

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 令和 5 年 1 月 10 日～ 1 月 11 日

2. 視察内容

- ①不登校対策支援プログラムについて
- ②登校支援室の目的と運営方法について

3. 視察先

- ①奈良県大和郡山市議会と学科指導教室 ASU
- ②愛知県春日井市下市場町 市立南城中学校

4. 調査経費 46,620 円

(経費内訳 交通費 39,420 円 宿泊費 7,200 円)

5. 調査研究活動の概要

別紙のとおり



5. 調査研究活動の概要

① 大和郡山市の不登校対策総合プログラム学科指導教室 ASU 新たな学びの場を目指して 設立経緯

- 平成9年 適応指導教室「あゆみの広場」開設するも不登校児童生徒の減少には至らなかった。
- 平成15年 不登校児童生徒支援教育特区申請 8月に特区の認定を受けた
- 平成16年4月に学科指導教室「ASU」開室（語源はAYUMI SQUARE UNIVERSEの頭文字）
- ASU(アス)とは・・・様々な事情で学校に行きづらい児童・生徒が、学校以外の場所で学ぶための小さな教室。個々の実態に応じた授業時数や授業内容を設定し新たな教科を設置するなど弾力的な教育課程の中で学習指導を行い体験活動を重視し、コミュニケーション能力の育成を図っている。原籍校に籍を置いたまま通学し、中学生はASU作成の調査書で高校受験が出来る。

特色

不登校児童生徒が明日への生きる希望を繋いでいけるように、新たな学びの場を提供

- 3つの柱 (1)心の居場所作り (2)豊かな体験活動 (3)進路保障
- 柔軟な教育活動を展開することが可能となるよう、現行の教育課程の弾力化を図る
- 市費負担常勤教員の配置 スタッフ常勤3名 非常勤6名 カウンセラー3名
- 市内の通学区域を弾力化し、転入学や主体的な進路選択が可能となるよう配慮
- ASUによる教室独自の調査書(内申書)作成が認められている。
- 臨床心理士が児童・生徒及びその保護者などを対象にカウンセリングなど心理的支援を行なっている。
- 公立の学校なので、授業料はかからない。校外活動の実費は負担が必要。
- 授業を担当する先生以外にもスタッフが個別に教えてくれます。家でできるプリントや市から貸与されたタブレットなどでも学習出来る。
- チャレンジタイムという児童・生徒が自分で計画を立て、得意な教科や学びたい学習に取り組むことで、意欲的な学習を促す時間がある。
- 球技大会に文化祭などの行事の他、花や野菜作りに誕生日のお祝いまである。
- 通学方法は様々な交通手段で通学して貰っているが、スクールバスなどは無し。

② 春日井市立南城中学校 登校支援室の目的と運営方法について

～みんなで育み みんなが輝く～

不登校の要因

- 令和2年度調査によると小学校・中学校共に、無気力・不安が46%を超えている
- 不登校者数が平成29年度から急に増加。100人以上増えて令和元年度から抜本的に対策。
- 不登校の小学生が最初に行きづらいつと感じたきっかけ
先生と合わない・怖い29% 身体の不調26% 生活リズムの乱れ25%
きっかけが何か自分でも分からない25% 勉強が分からない22%
- 不登校の中学生が最初に行きづらいつと感じたきっかけ
身体の不調32% 勉強が分からない27% 先生と合わない・怖い・体罰があった27%
友達のこと25% きっかけが何か自分でも分からない22%

登校支援室の目的

- 不登校の期間が長くなるほど復帰が困難になる傾向があり、未然防止と初期対応による新たな不登校者を生まない取り組みが重要である。そこで初期対応を重点的に実施する場所として登校支援室を設置する。支援に際しては登校という結果のみを目標にするのではなく、生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す。不登校傾向にある生徒を受け入れる位置づけ。

運営方法

- 登校することを最優先。登校後の過ごし方を自分で決める。学校の中に安心して過ごせる居心地の良い場所作りを目的とした運営方法とする。
- 3つの取り組みを中心に据えて運営。
 - ①生活のリズム作り 基本的な生活リズムを整える。
 - ②学習機会の保障 能力や意欲に十分配慮し、自主学習・遠隔学習・個別指導など様々な形で学習する機会を保障する。
 - ③人間関係づくり 会話や交流活動、ソーシャルスキルトレーニングなどを通して、他者と関わることを楽しみながら、対人、集団への適応力を育む。
- コンセプトは心のエネルギーが消耗している生徒たちが、ほっこりできる場所にする。

役割分担

- コーディネーター 投稿支援室運営の中心となる。各学校で一番力量のある先生を配置するように市教委が依頼。困っている子供を一番に思って、子供や保護者と関わり分かったことを学校全体に伝え、学校を変えていける人が担う。必要に応じて、市独自の加配措置あり。
- 教職員 学習指導や日々の連絡など。
- 支援員 部屋の雰囲気を作る重要人物です。教職員でも保護者でもない地域の大人が

務める。どの子にも気をかけ、声をかけ、時間をかけ寄り添いお世話をする
対話と共感を軸に据えて本人の意思を尊重すること、安心して過ごせることを目標に
している。

- 指導員 コーディネーターと支援員を指導する。

チーム支援

- 支援員は毎日記録を残し教員・他の支援員地の情報共有に努める。担任・コーディネーター・指導員は個別の目標設定や支援方法の見直し、支援室の環境整備について作戦会議を行う。

部屋の環境整備

- 生徒の動向が分かる連絡掲示板を設置。各校でコンセプトを掲げて室内の配置を考える。温かい雰囲気になるように意見を出し合いドレスアップしていく。

利用の仕方

- 先生と相談しながら生徒が自分で決める。
- 1日中支援室で過ごす。支援室からいくつかの授業に参加する。基本は教室だが辛くなった時、苦しくなった時に支援室で過ごす。週に1回1時間だけ過ごす。など。

生徒の過ごし方

- 学校の規則を守って生活し原則自分で決めた予定に沿って過ごす。教科学習、読書、塗り絵、作画、折り紙、パズル、トランプ、ボードゲーム、おしゃべり、オンライン集会、清掃、授業参加（オンライン）パソコン、ギター、裁縫など

成果

- 「この部屋なら来てもいい」などの声があり学校へ行かなければいけないと思いながらも、教室には足が向かなかった生徒が、登校できるようになった。疲れたからここで休ませると、エネルギー切れの時に支援室で充電し、また教室に復帰することができた。

所感

不登校になる児童生徒の原因は様々で、決め手となる解決策は今のところはない。
登校支援の仕方も様々で正解はないと思われる。それでも試行錯誤しながら生徒一人一人に寄り添い、現状を先ずあるがままに認めてやり、子供自身が見守られ受けとめてもらえているという安心感を持てるように配慮する教育を求められていると感じる。不登校は子どもの助けてほしいという悲鳴なのではないのか。発達障害やグレーゾーンの子供達に適切なサポートがなされていない可能性も考えられる。私の持論であるが、教育制度のマイナーチェンジは繰り返されたが、時代に即したモデルチェンジがなされていないという意見は2つの視察先で共通して本質的な問題と認識されていた。子どもを変えようとする前に大人が変わる必要がある。